

## 理科が危ない 理科を歩む

著者は九〇年代に日本物理学会会長であった理論物理学者。高校教科書執筆体験もあり、中高生が自ら挑戦することを念頭に、仁科芳雄、湯川秀樹や朝永振一郎、ファイマンなどの業績や著作を紹介してきた。このような立場から理科（特に物理）学習時間の大幅減少を憂慮し、理科離れ・理科嫌い現象にも早くから、積極的に発言し続けてきた。「理科が危ない」は理科教育批判を、「理科を歩む」は科学史や理科教育論（宗教・文学論も）を中心に、この間の論説・随筆に新稿を加えて編集されている。

著者の主張の大綱は次の三点にある。①学習指導要領による教育統制は間違い、教育は教師の手に返す②個性の名の下の早期選択導入には反対、体得の道筋は多様であるべきだが学校は万人に共通な基本をしっかりと教える③個性

著者一九三二年生まれ。学習院大学教授。『だれが原子をみたか』『漸近解析』『現代物理学』など。



新曜社・各1800円

## ‘学問は自分で紡ぎだすもの、の思い

は学校の授業だけでなく内外の自主的な諸活動で形成されるから理科教育の建て直しにば（社会の学問（科学）温度を高めることが最も肝要。すなわち、自主的な工作・実験の機会と場の保障、特に子どもから成人への各層に見合った良質な科学雑誌の再生・創造、無思考促進TV番組批判の世論の形成。

以上の主張の根底には「勉強は教わるものでなく基本的には自分でするもの」「学問は自分で紡ぎだすもの」との学習観・学問観がある。そこから「大学の講義を一年早く聞いても学問形成には無意味」との「飛び入学」批判が生まれる。

戦時中の模型飛行機少年から戦後の物理少年になった著者には「僕の人生の半分は自由を考え、切磋琢磨しあい、生涯の課題の芽を培えた中高生時代にある」との思いがある。中高生への科学推薦図書最後に吉野源三郎「君たちはどう生きるか」をあげたことにその思いとの重なりを読めるが、それは同時に入試全廃論への疑問や学校群批判に見られる旧制高校の学校肯定論ともつながる。それを含めて、提案には民主教育サイドが受け止め深めるべき内容が豊かにある。